酔眼粋筆

中島裕之　後期4年

全てはパラソルの下を通り過ぎるのだ。時間も、永遠も、運命の女も、妖婦も、ジュール・ヴェルヌも、法王新城も。

メランコリイの花咲く丘の上、書生さんの歌う恋唄は、宵の送電線に引っ掛かって、あの娘には届かない。

名残のニッカアスをはいて、今日はピクニックである。エラールのピアノもルイ十五世調の鏡台も、その他の装飾品も、ネクタイ止め1箇残して全て売り払い、彼は走ってここまで来た。死の影も借金取りも、もう追いかけては来ない。だが、記憶の中では匂いと味とがいつまでも残っている、とプルーストが書いているように、ブルジョワ製“巴里の宵”の匂いと、レスリー・キャロンのようなくちびるの味とは忘れることが出来ないのであった。

彼女の心臓の右の寝室には天使が、左の寝室には悪魔が住んでいた。

「詩人にも飽きたわ」と彼女が言う。未発表の恋愛詩が、庭の隅に埋められる。その上に慎ましい墓標と慎ましい花束。やがてその上に雪が降り積もる。その上にビーグル犬の足跡が付く。

ハンガリーの狂詩曲と白葡萄酒に興じていた彼は、ジョルジナ・スモルダンよろしく、歌わんとて立ち上がれば、少しよろける。

「殿下、何を読んでいらっしゃいます？」

「言葉、言葉、言葉。」

「J'ai lu tous les livresでencore des livres ならば、」

1966年来日したゴダールは、浜美枝の家で逆立ちをしてみせた後、人間関係上に於いての言語によるコミュニケーションの断絶はありえないと語った。

エンマは毒薬の盃に唇を当てた。それから暫くの後、我等のハムレットは、東京湾岸のとある酒場でギムレットを飲み干し、水銀灯の照らすハイウエイを突っ走る。隣には機械仕掛けのモダンワイフ。行先はヴィシーかバーデンか、或いは秋津か塩原か。沙翁のソネットロずさみ、奈翁の如く胸に手を当て、玉の緒ばかりの、美しき夜の思い出に片目を瞑る。大山鳴動して桃一箱。北の空に大きな月が掛かっている。兎たち、今宵はスウィート・ヴェルモットらしい。